

主観的程度表現について

—「～程度の」「～ほどの」「～くらいの」を中心に—

中俣 尚己 (実践女子大学 助教)

nkmt_n@yahoo.co.jp

1. はじめに

この論文では、話者から見た程度を表す表現である「～程度の」「～ほどの」「～くらいの」を主観的程度表現と位置づけ、その振る舞いをコーパスをもとに観察するとともに、今後このような表現の研究が重要になることを述べる。

まず、以下に主観的程度表現を定義する。

(1) 主観的程度表現の定義

話者はその量を多いあるいは少ないと捉えていることを伝える表現。

この定義は「少ないと捉えていることが伝わる表現」とするほうが正鵠を射ているかもしれない。主観的程度表現を使った時点で、多い、少ないという量の偏りが不可避免的に聞き手に伝わるからである。これは例えば以下のようなことである。

(2) クラスも違い、時々話す程度の間柄でしたが、やはり葬儀には参列したいと思います。

(BCCWJ 0C11_00877)

(3) 日本の芸術家で、彼ほどの快挙を成し遂げた者は他にいないと思いますよ。

(BCCWJ 0C15_00122)

(2)では話者が「時々話す」のは友達の間柄としては低いと考えていることが読み取れる。また、(3)では話者が「彼」を高く評価していることが読み取れる。特に(3)は「彼ほどの」の部分だけからでもその評価を読み取ることができる。

また、(3)の「ほど」を「程度」に置き換えてみると、「彼程度の快挙」という句は文法的には問題はないが、その評価は正反対になる。後ろに続く文も「彼程度の快挙を成し遂げた者なら、いくらでもいる」のような文になるであろう。「快挙」はプラスの価値を持つ語であるが、「程度の」が前接することで、そのプラスの価値は打ち消され、「大したことがない」という意味になる。この入れ替え操作から、「程度の」をはじめとする主観的程度表現は以下のような機能を持っていることがわかる。

(4) 主観的程度表現の機能

主観的程度表現は語のもつ客観的な意味を上書きする。

この機能のため、主観的程度表現は不適切に使用すると、誤解を招いたり、相手の感情を害する(野田 2005)危険性がある。日本語教育においては、格助詞の誤用などよりも注意して扱うべき表現である。

(1)の定義にあてはまる表現は品詞的には多岐にわたる。形容詞「～は多い」「～は少ない」の他、「～を占める」のような動詞も存在する。とりたてて助詞「も」「しか」が量の多少を表すことは周知である。本発表で扱う「～程度の」「～ほどの」「～くらいの」は特殊な名詞で、連体修飾節を導く働きをするといえよう。

以下はこの論文の構成である。まず、2. で先行研究を概観した後、3. では「～くらいの」について、4. では「～程度の」について、5. では「～ほどの」について、それぞれコーパスのデータを元にして評価の偏りについて述べる。6. では偏りをまとめたあと、ジャンルの違いや偏りの発生原因についての考察を行う。7. では結論をまとめるとともに、主観的程度表現の研究の重要性についても付言する。

2. 先行研究

学習者用の文型辞典では「ほど」だけが取り上げられており、いくつかの用法に分けて紹介されている。グループ・ジャマシイ(1998:528-532)では「…ほど…Nはない」は「…ほど」で表されたものの程度が一番高いことを表し、「…ほどの…ではない」「…というほどではない」は程度が高くない、軽いことを表すとしているが、ただの「…ほど」については程度の高低に関する記述はない。友松・宮本・和栗(2007:358-360)では「程度が高い時に場合に使われることが多い」とされている。

「ほど」、「程度」、さらに「くらい」を扱った研究としては丹羽(1992)がある。用法を(1)高程度(透き通るほど色が白い)、(2)低程度(効用と言えば、せいぜい人に安心館を与える程度だ)、(3)適当程度(病気しない程度に頑張りなさい)、(4)同程度(前回ほどの記録ができれば十分だ)、(5)不定程度(どれほどのものなんだろう?)、(6)概量(十分程度待った)の6つにわけた上で、次のように述べている。「大雑把に言えば、高低評価を伴わない場合は三者いずれも可能で、高低評価を表す場合は、「ほど」が高程度を表し、「くらい」は高程度を表すこともあるが低程度も少なくなく、「程度」は低評価に傾くという傾向を見て取ることができる」(p. 103)

これらは直感に頼った記述であり、正しいと思われるものの、接続する要素の違いによって、さらなる傾向の違いがわかる可能性もある。そのためにはコーパスによる実証的な研究が不可欠である。

3. 無標の「～くらいの」

ここでは、「くらいの」についてコーパス調査を行った結果を示す。使用したコーパスは国立国語研究所作成の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)2008年モニター版と、国立国語研究所・情報通信研究所作成の『日本語話し言葉コーパス』(CSJ)である。双方のコーパスにおいて「くらいの」という「の」のついた形を検索し、書き言葉から2854例、話し言葉から1644例を得た。続いて、「～くらいの」がついた句が高程度を表すか、低程度を表すか、どちらでもないかを筆者が判断した。中間程度やが概量などはすべて「なし」に入れた。

結論からいえば、「くらいの」は特に高程度・低程度に偏るといったことは確認できなかった。以下、割合をグラフで示す。

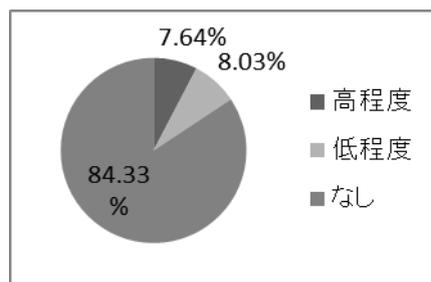


図1 BCCWJにおける「くらいの」の分類(N=2,854)

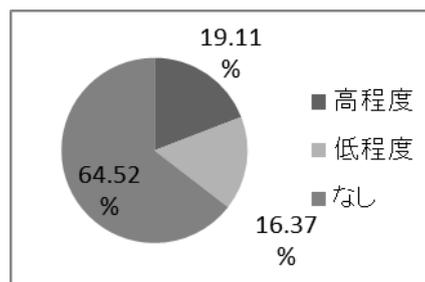


図2 CSJにおける「くらいの」の分類(N=1,644)

話し言葉の方が若干、「高程度」あるいは「低程度」の意味を帯びる割合が高いが、どちらかに偏っているわけではない。しかし、この数字を基準とすると、以下で述べる「程度の」と「ほどの」に偏りがあると判断することが可能になる。なお、「高程度」「低程度」「なし」の例をそれぞれ1例ずつあげておく。

- (5) 「そんなやつは居ないだろう」というくらいの慌て者が出てきてドタバタを演じるというものです。【高程度】 (BCCWJ 0C12_01148)
- (6) 最小限(F(?)う)ストーリーが追えるくらいのその前後の(D文)文脈をくっつけて(Fま一)採集したということです【低程度】 (CSJ A13M098)
- (7) 四角く包んだ、ちょうど両手で持てるくらいの大きさで、叔母は大事そうにそれを持つと、足早に奥へ入って行く。【なし】 (BCCWJPB29_00374)

4. 低程度の「～程度の」

ここでは、「～程度の」についてコーパス調査を行った結果を示す。調査の方法などは「～くらいの」と同様である。BCCWJでは「～程度の」は1576例あったが、このうち「ある程度」という組み合わせが411例を占める。

- (8) 千葉の木更津方面に潮干狩りに行こうと思っています。一度もやったことがないのですが、誰にでもある程度の量はとれるのですか？ (BCCWJ0C13_01540)

この「ある程度の量」は高程度ではないだろう。かといって、低程度だと積極的に認定することも難しい。おそらく中間程度の量だと思われるが、本研究では「ある程度」を分析から除外した。もしこれを低評価に加えれば、「程度」は相当低程度に偏る。

以下、割合をグラフで示す。

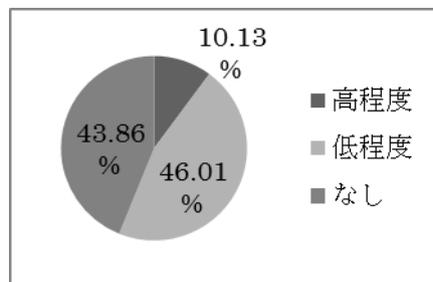


図3 BCCWJにおける「程度の」の分類(N=1,165)

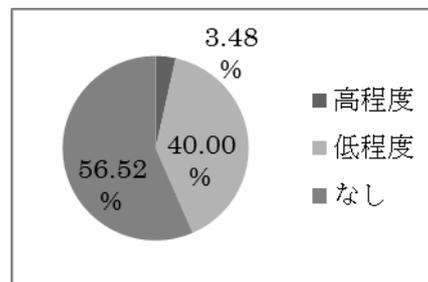


図4 CSJにおける「程度の」の分類(N=230)

低程度の割合が多く、高程度の割合は少ない。少なくとも「程度の」が高程度に使われることは少ないようである。以下、「高程度」「低程度」「なし」の例をそれぞれ1例ずつあげる。

- (9) 精神又は神経系統に、労働が著しい制限を受けるか、又は労働に著しい制限を加えることを必要とする程度の障害を残すもの【高程度】 (BCCWJ_PB43_00612)
- (10) 例えばの話なのですが、寄付金は税金を控除されるといいますよね？例えば、募金箱に数千円入れた程度のものは、領収書がありません。【低程度】 (BCCWJ_OC03_01111)
- (11) 当初およそ千二百個程度の機雷が敷設されたと理解しておりますが、【なし】 (BCCWJ_OM45_00001)

なお、(9)は法律の条文であるが、「～程度の」の高程度の例の多くは、法律の条文か白書に出現した。やや特殊な例であるといえる。

4-1. 「～程度の」の前接語による分析

次に、前接する要素を指示詞、述語、数詞、名詞、その他に分けて、偏りをみたものを表1に示す。

表1 「～程度の」に前接する語のタイプ別分類

	高程度	低程度	なし	総計
指示詞	6 (2.8%)	166(78.7%)	39(18.5%)	211
述語	40(12.2%)	224(68.5%)	63(19.3%)	327
数詞	51(8.5%)	129(21.5%)	419(69.9%)	599
名詞	2(1.1%)	103(57.2%)	75(41.7%)	180
その他	27(34.6%)	6(7.7%)	45(41.7%)	42
総計	118	536	511	1165

まず、偏りが最も大きいのが指示詞であり、8割ほどが低程度である。

(12) お金、時間、健康管理。この程度のごく基本的なことに気をつけるだけでいい。

(BCCWJ_LBs1_00015)

非常に低程度に偏っている。「なし」も39例あるが、18例までが(12)のように前文脈に何らかの数詞が出現しており、具体的な数詞を指示詞が指す場合は、後述する数詞と同じ扱いになり、高低の偏りは消失すると考えられる。

(13) ことは四・三%増、住宅関係の資金まで入れますとこれが六・四%でございましたか、その程度の増になるように取り計らっておるところでございます。

(BCCWJ_OM37_00001)

また、述語と名詞の場合も低程度を表すことが多く、高程度を表すことは少ない。なお、述語は大部分が動詞であり、形容詞は5例、うち3例は「必要な」であった。

(14) 不良の中にも、俗な言葉で言えば鑑別所に行かぬでも保護観察程度で済む程度の不良もあれば、どうにもならぬような不良もあるわけでありまして

(BCCWJ_OM55_0000)

(15) 「アパート代と食事代、そして、いくらかのおこづかい程度の生活費ならさほどの金額じゃないでしょ」

(BCCWJ_LBg9_00161)

前に接続する要素で目を引くほど多いのは引用マーカーの「という」と否定辞「ない」である。「という」は41例出現し、37例が低評価である(90%)。「ない」は54例出現し、42例が低評価である(78%)。いずれも、全体の平均値以上に低評価に偏っている。

(16) 一番左側のエンジンの下部に自衛隊機の右の翼端が接触したという程度の接触事故で済んだわけでございますけれども

(BCCWJ_OM22_00001)

(17) デッキまで届かない程度の小声で、目を閉じたまま話し合う。

(BCCWJ_LBa9_00019)

数詞の場合は高程度・低程度の意味をもたないことが多い。

- (18) 毎日30分～40分程度のウォーキング（早歩き）をしています。まだ効果がありません。
(BCCWJ_OC09_02890)

4-2. 「～程度の」の後接語による分析

まず、前接語が指示詞と述語の場合は、後接語は「もの」「こと」や人を表す名詞が多い。これらはほとんどが低程度である。これは、指示詞「そんな」は低評価を表す場合も表さない場合もあるが、「そんなこと」「そんなもの」とした場合は低評価の読みに固定されると並行的な現象である。「こと」「もの」自体が属性をもたないため、半ば固定化しつつある「この程度」「その程度」などの低程度の意味をそのまま読み込んでしまうのであろう。

- (19) 誰かの助言が無いとこの程度の事が判断できないの??? (BCCWJ_OC14_00190)

- (20) 息子も腹を立てて、周りのこと一緒にその子を叩いたりしてしまったそうです。けれど、傷ができたというほどでもなく、なじる程度のものだったようです。相手の子は大きさに教師に訴えてきました。
(BCCWJ_OC10_00527)

一方、前接語が数詞の場合は、指示詞や述語の場合とは異なる傾向が見られた。最も多いのが抽象名詞「もの」(20例)であることに変わりはないが、以下は「割合」(10例)、「増加」(9例)、「水準」(8例)、「収入」(7例)、「範囲」(6例)、「時間」(6例)と数量と関係の深い名詞が並び、具体物を表す名詞はほとんど出現しない。

5. 高程度の「～ほどの」

ここでは、「～ほどの」についてコーパス調査を行った結果を示す。調査の方法などは「～くらいの」と同様である。以下、割合をグラフで示す。

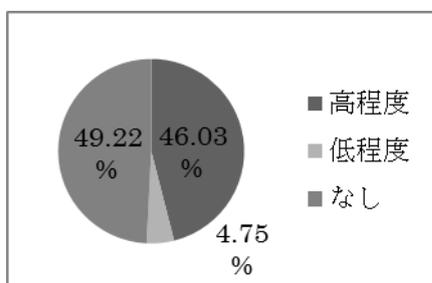


図5 BCCWJにおける「ほどの」の分類(N=1,979)

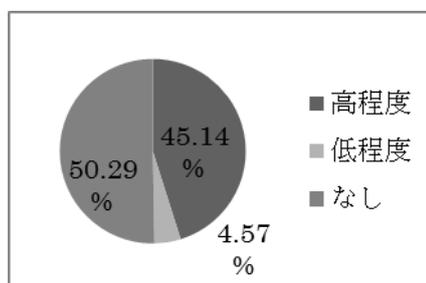


図6 CSJにおける「ほどの」の分類(N=176)

高程度の割合が多く、低程度の割合は少ない。少なくとも「～ほどの」が低程度に使われることは少ないようである。以下、「高程度」「低程度」「なし」の例をそれぞれ1例ずつあげる。

- (21) 確かに、どこの職場でも気の合わない人は一人はいるものですが、仕事に支障が出るほどのいじめは辛いものがあります。【高程度】
(BCCWJ_OC09_04502)
- (22) そうすると渋々ですが部品代に気持ほどのの上乗せをしてくれるお客さんも居ます
【低程度】
(BCCWJ_OC06_03373)
- (23) パソコンの画面上で見る限り、それほどのの差異は感じないように思います。【なし】
(BCCWJ_OC02_04408)

5-1. 「～ほどの」の前接語による分析

次に、「～ほどの」に前接する要素を指示詞、述語、数詞、名詞、その他に分けて、偏りをみたものを表2に示す。

表2 「～ほどの」に前接する語のタイプ別分類

	高程度	低程度	なし	総計
指示詞	107 (56.9%)	2(1.1%)	79(42.0%)	188
述語	786(68.4)	40(3.5%)	323(28.0%)	1149
数詞	25(4.0)	40(6.4%)	510(89.6%)	627
名詞	72(39.8%)	19(10.3%)	90(52.1%)	181
その他	0(0.0%)	1(11.1%)	8(88.9%)	9
総計	990	102	1062	2154

指示詞と述語では高程度が多いが、数詞と名詞では程度なしが多い。指示詞の高程度の割合は「程度」の低程度の割合と比べると多くはない。また、「程度」が高程度になるよりも「ほど」が低程度になることは少なく、「ほど」は低程度には用いられにくいことがわかる。

次に、指示詞の場合に注目すると、以下のようになる。

表3 「あれほどの」「これほどの」「それほどの」の程度

	高程度		なし	うち否定		計
		うち否定			うち否定	
あれほどの	17	8	2	1	19	
これほどの	57	33	10	1	67	
それほどの	31	15	95	60	126	

表3から、「あれほどの」と「これほどの」は高評価が多く、「それほどの」は評価なしが多いことがわかる。また、高評価の場合、否定的要素が後に出現することが多く、「それほどの」はどちらの場合も否定的要素が出現することが多い。以下、それぞれ例を見ていく。

- (24) しかし、こんな小さな城を、武田勢は、なぜあれほどの大軍で攻めるのであろうか
【高程度】 (BCCWJ_LBb9_00067)
- (25) エネルギーも、古典力学の観点からは、どうしてあれほどのエネルギーが出てくるか説明がつかないんですが【高程度】 (BCCWJ_PB40_00081)
- (26) いや、藤左のような老翁が、これほどのはたらきをしたのは、さすがに甲賀・山中忍びだといわねばなるまい。【高程度】 (BCCWJ_OB2X_00314)
- (27) 三つの役所が一カ所で同じことをやっているなんてこれほどのむだはないと思いますから、それはちゃんと整理をして、こういう情報というのはいわゆる専門家が使うことが多いと思いますから、そういう専門家の方々には周知徹底して、またそういう情報を必要とする機関というの数は決まってくることと思います。【高程度】 (BCCWJ_OM55_00006)
- (28) 先輩に挨拶できなかったのは、これまでの人生であの一回きりだ。それほどの負い目を、僕が小林さんに感じていた証拠でもある。【高程度】 (BCCWJ_OB3X_00033)

- (29) しかし、誘拐というのは、何か目的があつてするものだろう。してみると…。片山は、自分がそれほどの重要人物だろうか、と自問してみた。【高程度】

(BCCWJ_0B3X_00181)

- (30) 彼の身体の奥底から、そのとき母親が感じていた苦しみ、悲しみがわきあがってきました。そして、それほどの苦しみを抱えながらも、必死で自分を育ててくれた母親に「無償の愛」を感じたのです。【なし】

(BCCWJ_PB43_00783)

- (31) 私たちの声に、もし倍音が含まれていなかったら、私の声もBさんの声もDさんの声もそれほどの違いは出てこない。【なし】

(BCCWJ_PB37_00121)

高程度をもつものは文脈で指示対象をもつものが多く、程度なしのものは(31)のように指示対象を持たないものが多い。田窪(2008)は指示詞のソ系列が対象を直接指示できないことを示している。

述語が前接する場合、「～程度の」の場合とは異なり、形容詞の例も散見された。また、「～そうな」「～ていい」など種々のモダリティ形式がついた節も接続する。以下の例はいずれも高程度である。

- (32) まだ桜こそ咲いていないが、身が震えるほどの寒さは、もうない。【高程度】

(BCCWJ_PB29_00022)

- (33) 歩いているうちに体が夜の色につつまれ、やがて恐ろしいほどの濃い闇になった。

【高程度】

(BCCWJ_PB39_00031)

- (34) 遠くから眺めていた時のレイ子は、僕にはとうてい手の届かない、神秘的といつてもいいほどの存在だった。【高程度】

(BCCWJ_0B1X_00182)

- (35) 地面に伏していても、身体を持ってゆかれそうなほどの強風で、亘は思わず目を閉じた。【高程度】

(BCCWJ_0B6X_00062)

前に接続する要素で多いのは「程度」の時と同様、「ない」と「という」である。他に可能動詞も多い。また、「驚くほどの」が26例と単独の動詞では最も多かった。

一方、数詞と名詞は高程度でも低程度でもないものが多い。

- (36) ランはパリの北東百三十キロほどのところにあり、エーヌ県の県庁所在地である。

【なし】

(BCCWJ_LB09_00133)

- (37) 1ヶ月前に転んで左後頭部を強打し、ゴルフボールほどのコブができました。【なし】

(BCCWJ_OC09_03478)

例えば、(36)を「程度」を使って表現することは可能であるが、その場合どうしても低評価の意味が含まれてしまうのではないか。評価を含まない無色透明の意味として伝えるには「ほど」が適していると考えられる。

名詞に関しては、特にどのような名詞が多いという傾向は見当たらなかった。

5-2. 「～ほどの」の後接語による分析

前接語が述語の場合、後の名詞の出現数ベスト4は「こと」(57例)、「もの」(43例)、「意味」(13例)、「大きさ」(8例)であった。「こと」と「もの」は高程度も「なし」も同程度の割合だが、「意味」はほぼ「～というほどの意味」という形で「なし」が多く、「大きさ」はほぼ「高程度」である。

- (38) 「これから起こることは、何かどえらいことらしい」「世界を揺るがすほどのことらしい」という刷り込みを行ない、期待感を高めていく。【高程度】

(BCCWJ_PB46_00067)

- (39) 白いカバーで覆われた、クッションの良い、二人掛けの座席という以外には別に取り立てて言うほどのものはない二等車は、大勢の乗客に満ちた三等車に較べると寒々としていて、坐り心地が悪かった。【なし】

(BCCWJ_PB29_00105)

- (40) この場合の「手エ」は技術、というほどの意味である。【なし】

(BCCWJ_LBb9_00064)

- (41) 「ふっふっふっ、加代、この二人に科学の力とはどういうものか見せてやろうじゃないか。エネルギー全開！」と、レズリーが言うと、紫色の二つの球体は、それぞれが高層ビルをつつむほどの大きさにまで膨れあがった。【高程度】

(BCCWJ_PB49_00071)

また、前接語が数詞の場合は特異性が見られる。多い順に「ところ」(30例)、「間」(27例)、「距離」(12例)、「長さ」(8例)、「広さ」(8例)となり、すべてが時間か空間に関係する名詞である。一般的に多くみられる「もの」「こと」は目立たない。最も多いのは(42)のような「距離または時間+ほどの+ところ+広義の存在文」というパターンである。

- (42) 自動車で二〇分ほどのところに、標高一〇一二メートルの峠がある。【なし】

(BCCWJ_OB2X_00177)

前接語が述語の場合、後に来る名詞は「大きさ」(16例)、「もの」(10例)、「人・人物・方」(8例)、「天才」(4例)の順であった。

6. 偏りに関する考察

6-1. どのような要素が偏りやすいか？

4-1、5-1では「程度」と「ほど」の前に接続する要素の種類の違いによって、それぞれの程度低程度、高程度に偏るかについて見た。結果は、「程度」は指示詞>述語>名詞>数詞の順で、「ほど」は述語>指示詞>名詞>数詞の順であった。しかし、「ほど」の指示詞は具体的な指示対象をもたない「それほど」の例が多いために「なし」の例が多くなっているのであり、「これほど」「あれほど」は「程度」と同様に80%ほどの割合で高程度に偏ることを考慮すると、基本的には、具体的な指示対象をもつモノ・コト>一般的なコト>一般的なモノ>数量表現となる。これはすなわち以下の2つのことを意味する。

- (43) 一般的なモノ・コトよりも個別的なモノ・コトのほうが評価を帯びやすい。

- (44) モノよりもコトのほうが評価を帯びやすい。

これは今後評価的意味研究を進めていく上での指針となりうるであろう。

6-2. どのようなジャンルが偏りやすいか？

BCCWJは書籍・国会議事録・白書・Yahoo!知恵袋の4つのサブコーパスから構成される。このジャンルと評価的意味の関係について調べると興味深いことがわかる。表4は「～程度の」の偏りをジャンルごとにみたものであり、表5は「～ほどの」の偏りをジャンルごとにみたものである。

表4 「～程度の」のジャンル別分析

	高程度	低程度	なし
Yahoo!	4.09%	63.94%	31.97%
書籍	11.03%	58.22%	30.75%
国会	10.92%	27.82%	61.27%
白書	15.59%	19.89%	64.52%

表5 「～ほどの」のジャンル別分析

	高程度	低程度	なし
Yahoo!	40.39%	4.31%	55.29%
書籍	47.41%	5.05%	47.54%
国会	40.66%	1.10%	58.24%
白書	36.67%	3.33%	60.00%

「～程度の」の低程度の割合は Yahoo!と書籍では高く、国会と白書では低い。後者ではむしろ評価なしの用法が主流である。「改まり度」と関連があると思われる。なお、前接要素に偏りはない。

「程度」は前に指示詞が来た時が、最も低評価に偏りやすくなるが、国会議事録と書籍では、「程度」の前に指示詞が来る割合にはほとんど差がない。

この現象の解釈には2通りが考えられる。1つは「ほど」の高評価の意味は語の意味として十分に焼き付けられているので、ジャンルを問わずに使われるが、「程度」の低評価の意味はそれほど焼き付けられていないので、改まった場面では使いにくいということである。もう1つは、そもそも低く評価するという言語行動自体が、国会や白書といったフォーマルな場面では行われないう、というものである。

6-3. 偏りが生じた原因は何か？

ここでは、あくまで仮説レベルであるが、「程度」が低程度に偏り、「ほど」が高程度に偏るようになった原因を考える。

「ほど」の原義は「時点」とか「地点」といった意味である。現代語で言うところの「山の中ほどに小屋があった」のような意味である。万葉集では「間」字を「ほど」と読む説もある。

(45) くさまくら たびなるほどに (客有間尔) さほがはを あさかはわたり

(『万葉集』四六三 読みは『新編国歌大観』に拠った)

この意味については特にプラスになる要素はないが、後に「～する間に」という意味で、「～ほどに」と「～ばかりに」との競合が起こった。「～ばかり」はマイナスに偏っているので(中俣2010参照)、その反動で「ほど」がプラスになった可能性はある。

一方、「程度」の使用は19世紀以降と考えられる。こちらは同種の要素をイメージさせる働きがあり、中俣(2010)の経験基盤的ヒエラルキー構造から低程度の意味を獲得した可能性がある。

これは上位にあるものは数が少なく、下位にあるものは数が多いという我々の経験を図にしたもので、「そんな」や「なんか」など、同類の集合を表す語が低評価の意味を獲得することを説明できる。

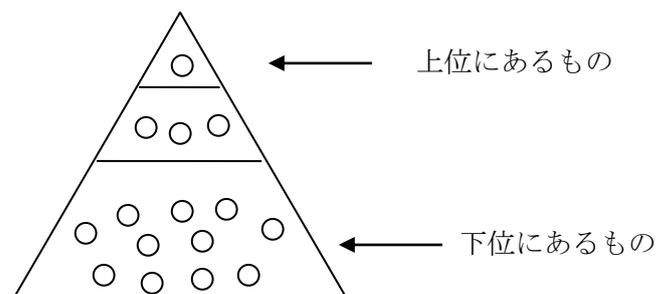


図7 経験基盤的ヒエラルキー構造 (中俣2010)

7. おわりに

この論文で主張したことをまとめる。

- (46) 「くらのい」を中立とすれば、「程度の」は高評価には使われず、「ほど」のは低評価に使われない。
- (47) 前接する要素から考えると、一般的なモノ・コトよりも個別的なモノ・コトのほうが評価を帯びやすく、モノよりもコトのほうが評価を帯びやすい。
- (48) 「ほどの」はジャンルによる偏りは見られないが、「程度の」はくだけた表現ほど低評価に偏る。

最後に、このような研究の意義について述べる。主観的程度表現はまず第一に評価的意味と結びついている。「これほどの作品」「この程度の作品」は程度というよりむしろ評価であろう。このような評価的意味はともすれば実質語の意味の問題と考えがちであるが、この論文で示したとおり、機能語にも偏りは見られる。(同種の問題として中俣 2011 では条件表現に見られる偏りを取り上げた。)

評価的意味ないし主観的程度を持つ語は多いが、必ずしも辞書に書かれていないというのが問題である。筆者は「この程度の論文は……」と学習者に褒められた経験がある。「この程度」が悪い印象を与えるということ知らなければどうしようもない。また、以下のような誤用例も主観的程度に関わるものである。これは例が少ないということを主張したかったのであるが、「占める」のせいで、実際の数字にかかわりなく「多い」と解釈されてしまう。

- (49) 上述の「也」の母語転移と考えられる語順不適切型が3例含まれ、誤用全体の3%弱を占める。

すなわち、冒頭で述べた(49)の指摘が重要になってくる。

(50) 主観的程度表現の機能

主観的程度表現は語のもつ客観的な意味を上書きする。

扱いを間違えると誤解を生みかねない表現を、うまく使いこなすにはどのような方略が有効なのか、日本語教育にとっては重要な問題である。会議ではこの意識を共有することができた。

参考文献

- グループ・ジャマシイ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版。
- 田窪行則(2008)「日本語指示詞の意味論と統語論—研究史的概説—」寺村政男・久保智之・福盛貴弘(編)『言語の研究：ユーラシア諸言語からの視座』大東文化大学語学教育研究所 pp.311-337 (田窪行則(2010)『日本語の構造 推論と知識管理』くろしお出版 pp.289-316)
- 友松悦子・宮本淳・和栗雅子(2007)『どんな時どう使う日本語表現文型辞典』アルク。
- 中俣尚己(2010)「「そんな」や「なんか」はなぜ低評価に偏るか?—経験基盤的ヒエラルキー構造からの説明—」『JCLA』10, 日本認知言語学会, pp.437-447.
- 中俣尚己(2011)「条件表現と評価的意味—「なら」と「と」に見られるプラス・マイナスの偏り—」『日本語学会 2011 年度秋季大会予稿集』日本語学会, pp.115-122
- 丹羽哲也(1992)「副助詞における程度と取立て」『人文研究』44-13, 大阪市立大学文学部, pp.93-128.
- 野田尚史(2005)「コミュニケーションのための日本語教育文法の設計図」野田尚史(編)『コミュニケーションのための日本語教育文法』, くろしお出版, pp.1-20.